

最後に一つ、見過ごすことのできない、情報の欠落がある。本書では図表が多用されて科学的データがさかんに紹介されているにもかかわらず、住血吸虫のライフサイクルの図が存在しない。たとえば、米国 CDC は、web 上でこの情報を提供している。参照されたい。www.dpd.cdc.gov/dpdx/HTML/ImageLibrary/SZ/Schistosomiasis/body_Schistosomiasis_il10.htm

参考文献

John Farley, *Bilharzia: A History of Imperial Tropical Medicine* (Cambridge: Cambridge University Press, 2003).

Iijima Wataru, “‘Farewell to the God of Plague’: Anti-Shistosoma japonicum Campaign in China and Japanese Colonial Medicine,” *The Memoirs of the Toyo Bunko* 66 (2008): 45–79.

注

- 1) 石井明, “日本における住血吸虫研究の流れ”; 田中寛, “宮入慶之助と中間宿主カイ発見”; 辻守康, “片山記から片山病の防圧まで”; 多田功, “九州大学にお

ける宮入慶之助”; 小林照幸, “住血吸虫研究史における人間ドラマ 取材雑感から”; 清永孝, “慶之助とホタルと左京”; 宮入源太郎, “人間・宮入慶之助”; 宮入健三, “宮入慶之助記念館の開館”

- 2) 葉袋勝, “山梨県の住血吸虫の防圧”; 塘普, “筑後川の住血吸虫防圧”; 青木謙二, “ケニアに住血吸虫症と防圧”; 安高雄治及びその他の者, “住血吸虫症と感染行動”; 太田伸生, “中国における住血吸虫症”; 松田肇・桐木雅史, “メコン住血吸虫症”; 林正高, “フィリピンの日本住血吸虫症・脳症型, 肝脾臓腫型の臨床と同症に対する挑戦”; 梶原徳明・阪幸男, “中間宿主ミヤイリガイの殺具による日本住血吸虫症の制圧”; 二瓶直子, “GPS で住血吸虫症流行を追う”

- 3) 中島敏郎・平田瑞城, “日本住血吸虫症の病理形態学”; 大橋眞, “住血吸虫に対する生体の防御機構”; 小島莊明, “住血吸虫症のワクチン”; 平山謙二, “住血吸虫感染と体質”; 岩水襄, “ミヤイリガイの生物学”

(Alexander Bay)

[九州大学出版会, 〒812-0053 福岡県福岡市東区箱崎7-1-146, TEL. 092 (641) 0515, 2005年12月, B5判, 277頁, 5,500円+税]

小泉和子 編著

『家で病気を治した時代——昭和の家庭看護——』

医療を利用する側の立場の国民一般、それも家族の健康を守る役割にある主婦の視座からみた家庭看護の歴史書が著された。家庭看護がもっとも発達した時代として「昭和戦前期」を取り上げている。明治32年の高等女学校令の制定により、女子に国家が求めたのは良妻賢母の理念であり、女子にとっては中等教育でありながら高等女学校と命名された。この女学校の教育の中に家政学があり、そこには育児や養老、家族のなかの病人の看護が主婦の役割とされ、その方法が教授され、教科書にもこれらの項目が掲載されている。

看護には二通りの意味がある。すなわち、家庭看護と専門職看護である。前者は一般人が行い、後者は資格を有する看護職が担当する。このふたつの流れは近代以後、相互に影響しあい、現在においても構造的には変わらない。

本書の編集者で著者の小泉和子氏は、日本家具、室内意匠、生活道具史が専門で、工学博士、生活史研究所を主宰され、東京の中央区で「昭和のくらし博物館」という私設博物館（1999年設立）を運営されている。ここで年に1度企画展を開催し、第1回のテーマは「家庭看護」第5回「町のお医者さん」第7回が「家で病気を治した時代」で、本書は第7回の企画をもとに、医療に関する前述の2つを加えた内容となっている。

昭和戦前期はもっとも家庭看護の発達した時代だった。氷枕、氷嚢、体温計、吸入器、浣腸器は多くの家庭にあった。切り傷にドクダミ、腫れ物にツブブキ、民間療法の知識も豊富だった。ひとたび家族のだれかが病気になれば、家族が力を合わせて看病し、病気と闘った。産婆も町医者も按摩も鍼灸師もそれを助けた。家のなかで人の生死

に向き合うことで、命の尊さとそれを守ることの難しさを痛感した時代であった。医療の充実を願うことは病気を医者まかせにすることではない。病気も生も死も自分のこととして立ち向かった時代から学ぶものは多いのではないだろうか。

本書の内容と構成は、第1章家で病気を治した時代—都市と農村にみる家庭看護、都市にみる家庭看護の最盛期、農村に多い病気と治療、第2章変わり行くお産のかたち、出産—妊娠から産湯まで、助産師と消え行く自宅分娩、第3章恐れられた病気—結核と急性伝染病、「国民病」と呼ばれた結核、猛威をふるった急性伝染病、第4章家庭看護と人、派出看護婦と保健婦、按摩と鍼灸師、となっている。コラムには「家庭看護の七つ道具」「配置家庭薬と家庭常備薬」「生活の知恵として普及した民間療法」「町のお医者さん」「駒込病院雑詠」「町のハイカラだった医院建築」があげられ、小泉氏を含め11名で執筆されている。

専門職看護の立場で拝読させていただいて驚いたのは、注射を自宅で家族がしていた時代があったことである。これは第1章の都市の部にある『細雪』にみる家庭における病気への対処の小項目でとりあげられている。『細雪』は谷崎潤一郎の代表的な小説で、書かれている時代は昭和

11年から16年である。「ビタミンBの注射をするのが癖になってしまって、近頃では医者へ行くまでもなく、強力ベタキシンの注射薬を備えておいて、家族が互いに、何でも無いようなことにもすぐ注射し合った」というのである。強力ベタキシンは、バイエル社から売り出されていた合成結晶ビタミンB₁の商標名で、1日に1, 2アンプルを皮下または筋肉内に注射することで脚気の治療に効果があった。注射をする場面もきわめて具体的に書かれている。かかりつけの医院で注射法の指導を受けているとは思われるが、戦前期に一般人が家庭で注射をしていたという事実を知ることができた。

家で病気を治していた時代、地域のなかで家族全員の病歴を知っているかかりつけの医者のおかげの下で、家族が力を合わせて病気を治していた時代から、医療を自分の問題として自分で引き受けるという主体性がみえてくる。そのなかで初めて良い医療とは何かがわかり、何をめざしていくのかがわかるのではないだろうか。

(平尾真智子)

〔農山漁村文化協会、〒107-8668 東京都港区赤坂7-6-1, TEL. 03 (3585) 1141, 2008年2月, 25×19cm, 174頁, 2,800円(税込)〕

岩間真知子 著

『茶の医薬史—中国と日本—』

茶は世界中で広く利用されており、一口に茶といっても加工・調製法によって様々である。加工の早い段階で熱を加えれば、日本茶のような緑茶になるが、発酵させれば烏龍茶や紅茶のようになる。また飲むときの調製法でも、湯を注いで抽出する場合もあれば、しばらく火をかけて煮出すこともある。あるいはバターなどの乳製品や香料などを加えることもあり、各地の文化に根付いている。他方、茶外の茶といわれるものもあり、茶とは全く異なる植物でありながら、同じように嗜好品とされたり、茶のように調製したりするものも

総じて茶と呼ぶ。これを考えると、茶を論考するには基原となる植物自体だけでなく、その加工・調製法、それを利用する地域の文化など様々な背景が関わってきて、本書が絞った中国と日本を中心とした医薬史というテーマでさえも、扱うべき資料は膨大であることは容易に理解されよう。そうした中で、本書は中国日本各々について、時代ごとに数々の文献を整理し、それらの多くについて影印を附している。本書について著者が冒頭で、貴重な資料を伝えることが使命、と語っておられるように、本書全体を通して著者の真摯な研